

明石市

# 国際協力海外レポート

高澤 道夫（たかざわ みちお）【JICA シニア海外ボランティア】

赴任地：カンボジア王国 プノンペン  
職種：工作機械  
赴任期間：2014年3月～2016年3月（予定）



明石市のみなさん、こんにちは。私は明石市内にある川崎重工業に約40年勤務し、60才で定年退職後も再雇用制度で仕事を続けていましたが、思い切ってJICAのシニア海外ボランティアに応募して合格。62才でこちらに来ました。

前職の仕事は忙しく、また責任もありましたが、この位の年齢になると、胸わくわく感が薄れてきて、先もある程度見えてくるなかで、若い時に一生懸命打ち込んだ技術者としての仕事にもう一度チャレンジしたいと、一念発起したのが応募理由です。仕事で何回か海外出張したときに異文化に触れ、違う国の人たちと話をする楽しさが忘れられなかったことも、海外を目指した理由のひとつでした。しかし、海外で長期間生活するのも、仕事をするのも初めての経験で、赴任後の半年はあっという間に過ぎました。生活にはだいぶ慣れましたが、仕事は様子があったぐらいで、まだまだこれからです。

皆さんがカンボジアと聞いてまず思い浮かぶのは、アンコールワット遺跡や、ポルポト時代の大虐殺のことではないでしょうか。赴任前は私もそのくらいの認識で、テレビの放映も少なく、町がどんな様子か、人々がどんな生活をしているのか、インフラがどうなっているかなど、ほとんど知りませんでした。

私の赴任したプノンペンは、想像していたより、はるかに都会で、高層のオフィスやアパートメントが立ち並び、ホテル、レストラン、スーパーマーケット、コンビニ、いろいろな専門店、銀行、ATM・・・など、生活するには全く問題ない状況でびっくりしました。

経済成長著しく、街には人が溢れていて、アパートなどの建設ラッシュです。道路にはバイクや車（どちらもほとんどが日本製）、トゥクトゥク（リヤカーに屋根を付けたような車にお客さんを乗せバイクで引っ張って走る）がひしめき合うように走っていて、とても活気があります。

しかし、交通ルールを守ろうという意識は薄く、信号を守らない、センターオーバーや逆走も当たり前で、信号のない交差点では、4方向から我も我もと突っ込んできて、全く動きがとれなくしまうことがしょっちゅうあります。他にもひったくりや強盗も増えており、街を歩くときは、交通事



アパート近くのビルから望むプノンペン市



信号のない交差点ではいつも  
さっちもいかない状態がしょっちゅう

故とひたたくりに会わないよう、いつも気を張って歩かなければなりません。ただ、こういう状況は、地方都市ではあまりなく、先日訪れたシェムリアップは、落ち着いた雰囲気のある町でした。

気候は、赴任直後の3月から5月は一年で最も暑い時期で、最初はこの国でほんとうに暮らしていけるのかと思いました。私が勤めている学校の校長は、「カンボジアには二つのシーズンがあります。ひとつは『ホット・シーズン』もうひとつは（ここで少し期待をもつが・・・）『ベリー・ホット・シーズン』です。」が決まり文句です。

しかし、6月から雨季に入り、朝は涼しく、昼も暑さがましになり過ごし易くなりました。

私が配属されたのは、2005年に設立された国立技能専門学校です。技能専門学校といっても、4年制コース卒業の学生には大卒の資格が与えられ、カリキュラムにも高度な内容が組み込まれています。学生数は現在約2000人で、教員数は約250名と規模も大きく、また教授陣や学生は非常に優秀で、カンボジアの職業訓練校をけん引する存在になっています。ただ、企業は生産ラインの操業管理や改善、不具合発生時の対応等を行う一定の技術力を備えたテクニシャンや、ライン等の設計や不具合の原因究明を行うことのできるエンジニアを求めているのですが、カンボジアでは、まだそのレベルに至っておらず、中国、タイ等から人材を派遣するなどして対応しているそうです。

この学校で日本からのボランティアを受け入れるのは、今回の私たち（他に溶接が専門のシニアボランティアが1名）が初めてです。学校側の要請では、本校の教授陣は非常に優秀だが現場での実践経験がないため、さらなるレベル向上のための実践的な助言を求めているとのことでした。カンボジアはポルポト時代や内戦の影響が大きく、まだ農業や観光が主要産業であり、縫製業が主の工業は、まだまだこれからです。

私の仕事は、ここの機械系の学生に対する工作機械実習を担当している先生（カウンターパート）の支援です。主な工作機械は普通旋盤、フライス盤、研削盤、ボール盤などです。学校に赴任してから今までの5か月間は、カウンターパートの授業に出て、何をどう教えているのか現状の把握と、カウンターパートの技術的な質問に答えて資料を作成し、提供したりしてきました。この先生は、1996年に10ヶ月間日本で研修した経験があり、とても優秀で、日本においても今は少なくなった熟練工レベルのスキルを持っています。

今まで授業を見たり、先生と話をし、前述の企業で求める人材育成のためには、そして学生が実際に企業で働くときに何が必要かを考えてきました。やりたいこと、やらなければならないことも見えてきましたので、これから JICA や学校



校内の様子



実習教室で先生、学生達と。ここが職場。



プレゼンの様子

と相談し、支援を得ながら実行していくつもりです。私の仕事は、学生を直接教えることではなく、先生を支援することですが、先生は先生で考えがあるし、プライドも持っています。だから自分の考えを無理に通すのではなく、人間関係を大事にしながら、急がずに活動していこうと思っています。



キャンピングの進行

学校に赴任して1ヶ月後ぐらいの5月下旬に、学校の学生、先生、スタッフ全員参加の大キャンプ大会がありました。今年は約2千人が参加しました。2年に1回開催されている恒例行事で、2泊3日で行われます。1日目午後のセレモニーで始まり、2日目は早朝から約6Km離れた湖畔まで歩いて行って飯盒炊さん、3日目は終了のセレモニー、後片付けをして解散。この間の食事は全て学生が、先生やスタッフの分まで作ってくれました。泊まるのは学校、私も教室に他の先生たちと2晩雑魚寝しました。

先生や学生たちとも仲良くなったし、学生の作ってくれるクメール料理はびっくりするくらいおいしかったし、60才代にはしんどい面もありましたが、とても楽しい出来事でした。



校内に泊まって先生たちと親睦会

生活の中や勤め先で接するカンボジアの人たちは、温和で、やさしく、気遣いをする人が多いように思っています。交差点での我も我もの状態も、バイクや車の微妙なすれ違いを見ていると、自分勝手だけでなく相手への思いやりもあるように感じます。

ただ、街にはごみが溢れており、カンボジア人のごみの捨て方を見ると、きれいにしていく気があるのか疑問に感じることもあります。

カンボジアの国語は、クメール語です。生活言語ということで（仕事は英語）、派遣前の訓練、現地へ赴任後の研修を含め約3か月間勉強しました。仕事は、どうしても英語になり、時として日本語になり、どうしてもクメール語を話す機会が少なくなります。せっかく勉強したのだから、もう少し話せるようになりたいと思っていますが・・・難解！ただ、言葉と一緒にカンボジアの文化も学ぶことができたのはとても良かったと思います。

日本では、妻と、愛犬の「なっちゃん」の2人と1匹で暮らしていました。今もそのまま、プノンペンで暮らしています。日常生活のことは妻がブログで紹介していますので、興味のある方はご覧になってください。

「よろしくね。カンボジア」 <http://102847.blog.fc2.com/>

2014/10/5 JICA シニア海外ボランティア 高澤 道夫